

七月の初めに一通の封書が届いた。

高校の同窓会のクラス幹事を務める元同級生からで、八月第二週の土曜日に学年同窓会を開催することになったという。その出欠の返事を同封のはがきで返送してくれとのことだ。

「そうか、今年は卒業十年の節目にあたるんだ」

永穂知美は案内に目を通して呟いた。

同窓会は久しぶりだ。知美たちのクラスは幹事があまり熱心でなく、かつ、皆のノリもいまいちで、声をかけても毎度集まりが悪いため、クラス単位の同窓会ですらこれまで二、三度開かれたかどうかという程度だ。ましてや、学年全体ともなると、こうした大きな節目でもない限りまずやろうという話が持ち上がらないだろう。

カレンダーを見ると、その日はなんの予定も入っていなかった。知美は少し迷った末に出席するに印をつけて投函した。

普段、高校時代の友人とはめつたに顔を合わさない。会社の同期には、大学が一緒だった者は何人かいるものの、高校の同窓生はいない。都内の高校で、大学も就職先も東京という者が多いはずだが、知美は誰とも付き合いがなくなっていた。

それでも、本棚に差してある卒業アルバムを捲ると、あいつもこいつも懐かしいと当時のことが思い出されてきて、今はどう変わっているのか想像を巡らし、会いたい気持ちが強まった。

中でも知美の心に波風を立てたのは、中学から一緒で、高校では共に弓道部に在籍していた花巖啓介の凜然とした正面顔だ。

啓介——彼とも卒業以来一度も会ってない。

昔は他の誰とよりも仲がよかったと思うのだが、高二の二期あたりから少しずつ疎遠になっていた。これといった前兆もなかったし、原因になりそうなことがあったわけでもない。少なくとも知美には思い当たる節がなく、なぜ関係がぎくしゃくし始めたのかいまだにわからないままだ。明らかに避けられていて、啓介に知美と腹を割って話す気がないことが察せられた。それを無理に聞き出そうとするのは、知美の性格からしてできなかつた。

おまけに、啓介にそれまでとは違う態度をとられるようになって、知美は気づかされたことがあつた。

ずっと友情だと信じていた気持ちだが、実はもつと濃くて深い、恋愛感情に近いものだったのだと、距離を置かれて初めて知つた。

それは、自分を無視するようになった啓介が、代わりに他の男子や女子と楽しげに話をしているところを見かけるたび、もやもやした気分になり、そこは本来自分の居場所だったはずなのにという独占欲や我が儘が湧くにつけ、これはちよつと尋常でないのではと認めざるを得なくなつたのだ。

そのうち、啓介に彼女ができたらしい、との噂が流れ、知美ははつきりとショックを受けた。心臓に錐を刺されたような痛みを襲われ、胸が塞がれたように苦しくなつて、近隣校の一級下にいる有名な美少女だという見たこともない女の子に嫉妬した。

彼女ができたことと、啓介が知美に対してよそよそしくなつたことは直接関係ないはずだと、今でも知美は思っている。彼女ができればある程度そちらとの付き合いを優先させて、男友達には不義理をするというのはわかるが、啓介の態度はそんな浮かれた感じのものではなかった。

絶対に何か知美自身に思うところがあつて、それで必要最低限の言葉しか交わさないようになつたのだ。だが、それを啓介は最後まで自分の胸に秘めたまま、卒業式の日を境に知美の前から去つていった。

あれからもう十年経つのか、と当時を反芻し、深々と溜息をつく。

中学のときはそれこそ自他共に認める親友同士だつた。一年、二年と同じクラスで、お互いそこそこ目立つ存在で、最初のうちは相手を意識しすぎて話しかけづらい感じだったが、思い切つ

て知美のほうから話しかけてみたら、びっくりするほど会話が弾み、意気投合した。一学期の期末試験後のことだ。

以降、共に行動することが増え、気の置けない友人として知美は啓介に親しみを感じていたし、啓介の傍に居心地がよくて好きだつた。てつきり啓介もそう思つてくれていると信じて疑いもしなかつた。

高校も同じ都立に進学し、啓介に誘われて弓道部に入った。どちらかといえば文化系のサークルのほうで知美には馴染み深かつたし、性格的にも合つていてと思つていたが、啓介に「一緒にやるうぜ」と熱心に誘われ説得された。中学のとき、啓介はバスケットボール部だつた。背の高さを見込まれて顧問に勧誘されたらしい。

「なんでバスケット部には入らないんだ？」

「バスケット部も嫌いじゃないけど、高校では弓道をやるつて決めてたからさ」

「啓介は運動神経抜群だから何をやっても様になりそうだけど、俺は鈍いし、あんまり体力に自信ない。やつていけないかなあ……」

皆の迷惑になるのでは、と危惧する知美に、啓介は「大丈夫。俺がついてるから」と頼もしく請け合つてくれた。それで、決めたのだ。

実際、啓介のおかげで知美は脱落せずすんだ。

一年間みっちり基礎を学び、二年生のときには競技会にも出場することができた。一年生の頃から才覚を現し、早々と先輩たちに交じって大会デビューした啓介とは比べべくもないが、自分なりに満足のいく部活生活が送れたと、今でも感謝している。

そんなふうによくいっていただはすなのに、なんの悩みもなくべったり一緒にいられたのは、弓道部の夏合宿のときが最後だった。

夏期休暇中、山間の村にある合宿施設付きの弓道場に部員全員で十日間泊まり込みし、寝食を共にしながらみっちり練習する——夏合宿は毎年恒例となっている部活動の一環だ。三年の部長を筆頭に、二年生部員が入部して間もない一年生部員の指導にあたることになっており、総勢三十余名で厳しくも楽しい練習に一丸となって勤しんだ。

十日間の間には大小様々な諍いがあつたり、問題行動を起こす者がいたりしたが、知美と啓介の間にはそういった後々尾を引きそうな気まずい事態は起きなかった。

知美はいつものとおり啓介と軽口を叩き合いながら後輩の世話を焼き、ときには相談に乗ってもらつたり、乗つたりしつ、日頃の部活動のとき以上に密着したときを過ごした。

夜は六人部屋でそれぞれ布団を敷いて寝たが、相部屋の二年生の中に歯軋りがひどい男がいて、たまらんな、と苦笑いする啓介に誘われて、真夜中に星を見に外を歩いた日もあつた。忘れない、合宿最後の夜だった。

見晴らしのいい丘の上に背中合わせに座つて星を見上げた。

「夏の大三角、わかるか？」と啓介に聞かれ、「もちろん。あの上の星がデネブだろ。そこから少し右下にあるのがベガで、もつと下にある左側のがアルタイル」と得意気に答えた。そのうち、星より背中越しに感じる啓介の体温や、筋肉のちよつとした動きに気を取られ、なんだかおかしな気分になりかけたのを覚えていた。だが、そのときは、そのおかしな気分の正体がよもや同性に対して抱いてしまった恋心だとは考えもしなかった。

そして、啓介と築き上げてきた親友としての日々は、翌日貸切バスを降りて「じゃあ、また二学期学校で」という、何の変哲もない挨拶をキリに、瓦解していった。

二学期になって再び校内で顔を合わせたときには、すでにとりつく島もなくなっていた。廊下等ですれ違つても無表情のまま、話しかけても必要最低限の受け答えしかしない。ときには無視されることもあつた。いかにも迷惑そうな様子に、知美は傷ついた。

啓介とは高校のときには一度も同じクラスにならなかつた。知美は文系志望、啓介は理系志望と進路が違つており、部活以外での接点はほとんどなく、その部活ですら三年生の夏で引退した。